

土木学会誌2012年新年号 一対談一

これからの土木を考える

【対談メンバー】

仁杉 巖

名誉会員 極東鋼弦コンクリート振興 取締役最高顧問

丹保 憲仁

名誉会員 北海道立総合研究機構 理事長

【司会】

大内 雅博

学会誌編集幹事長

——まずは、土木の枠を超えた先生方のこれまでの生き方と土木の関係についてお話しただけですか。

PSコンクリートのパイオニアになるまで

仁杉——小さい頃から建築か土木をやりたいと思っていました。建築は絵が描けないのであきらめました。が、万里の長城のような後に残る大きなものをつくりたいと、東大の土木に進みました。

大学では学校の先生や研究者になるという考えはなかったのですが、隅田川の橋をつくられた橋梁の

【オブザーバー】

知花 武佳

2011年7月26日(火)
土木学会役員会議室

田中豊先生に非常にかわいがられました。2年のときに実習で満州へ行き、満鉄がつくっていた興安嶺の2000mのトンネルの現場にやられました。僕の

卒業設計は満州のスガリ(松花江)の橋梁です。

大学を1938年に卒業し、鉄道省に入省して、コンクリートの専門家がないということで、研究所に配属になりました。その後すぐ鉄道連隊で4年間兵役につき、43年に戻ってきました。そのときに研究所の顧問になっていたのが、僕が大学を卒業したときに入れ違いで教授になっていた吉田徳次郎先生でした。吉田先生が1週間に一度研究所に来られるときにお相手をする事になり、やってみると言われたのがPS(プレストレスト)コンクリートだったのです。当時は枕木になる材料の木材がなく、しかも鉄道を高速にするには下の軌道を重くしないといけないということで要求が強くなっていました。こうして、さまざまなどころから材料を調達し、PSコンクリートのパイオニアとして、初めてピアノ線が入ったコンクリートをつくりだしました。

私の衛生工学の根には土木がある

丹保——太平洋戦争に日本が負け、終戦を迎えた

